梅花と詩

この立体模型は 730 年の大宰府師、将軍の大伴旅人(紫色の衣を着用)の邸宅で梅の開花の宴を描いたものです。中国から導入され当時は珍しかった梅の木の下に官吏が一同に集まり飲食し即興詩を作りました。

この宴は日本文化の中で深い意味を持っています。万葉集(現存する最古の日本歌集で 8 世紀のもの)には、この宴からの 32 首の歌が残されています。現在の日本の政府関係者や歴史学者が、この詩の前書きに書かれた漢字に着想を得て、令和(2019 年–)と名付けました。

7 世紀から 12 世紀は大宰府の歴史の黄金期であり、この時期には、大宰府の役人は、大宰府がアジア本土に近いことや他国の人々と頻繁に交流していることから、外国の文化に対する深い理解と認識を持っていました。彼らは外交や武芸に優れていましたが、堪能な歌人であることも期待されていました。梅の開花の宴の参加者は、彼らの技能を使って、開花、天気、卓越した宴の雰囲気などを題材にした即興詩を作ったのでしょう。参加者が話している中で記録官がその詩を記しました。

この絵画の中の博多人形は、福岡独特の非常に繊細な磁器で作られています。よく見ると、盃の中や参加者の髪の中に梅の花が見えます。役人や官吏は、身分を簡単に見分けやすいように異なる色を身に着けています。

梅の木は太宰府では特別な意味を持っています。太宰府天満宮の境内には、伝説の 「飛び梅」 の木など、梅の木がたくさんあります。伝説によると、この木は自身で根を抜き、日本の社会と文化に多大な貢献をした非常に重要な歴史上の人物である菅原道真が亡くなった後に、京都から太宰府に飛んだと言われています。

菅原道真とは誰ですか?

菅原道真(845~903 年)は、伝説的な学者・政治家です。彼は太宰府天満宮に祀られ、霊界に入ってからは学問・文化・芸術の神である天神として知られるようになりました。道真は特に梅の木が好きでした。